

インタビュー・制新政意

山形県村山総合支庁総務企画部
企画振興課の武田公治課長に聞く

県境を越えて地域間交流に取り組む

～やまがた・仙台交流連携促進会議～



昨年七月、山形県村山地域十四市町、宮城県仙台都市圏十四市町村、計二十八市町村が会しての「やまがた・仙台交流連携促進会議」が発足した。県境を越えた地域間の情報交換、交流・連携をバックアップする行政による新たな取り組み、および関連する施策について、山形県村山総合支庁企画振興課の武田公治課長に聞いた。

「やまがた・仙台交流連携促進会議」という組織・会合が新たに立ち上がったが、県境を越えた地域間交流が求められる背景は何か。

武田課長 高速道路などの交通・輸送体系の整備、情報機能の発達により、山形県村山地域と宮城県仙台都市圏の合計二十八市町村が互いに極めて身近な存在となった。仕事や通学、買い物やレジャーなど、さまざまな面で住民レベルでの交流が盛んになってきており、約二〇〇万人の交流人口圏ができあがりつつあるといえる。それに比べて、行政、特に市町村レベルの交流が遅れていると感じている。これまで、県境を挟んだ市町村が、お互いどんな施策を展開しているのか、どんな課題を抱えているか、分かっていることが

多かった。お互い協力すべきことがあるはずなのだが、そのことを議論する場もなかった。まず、市町村行政レベルの議論の場を持つことにした。

山形には観光面で仙台と異なった魅力がある。産業面では、製造業が仙台に負けないくらいしっかりとっているし、農業の分野でも山形は果樹が多い。一方、都市機能は仙台に集積しているの、この部分では仙台に吸引力がある。このように山形と仙台では特性が違い、お互い補完し得る関係にある。交流することによって、どちらにもメリットがあるかという議論もあるが、大切なのはお互いの資源を上手に利用し、補完し合うことによって、お互いの地域が活性化するという視点である。

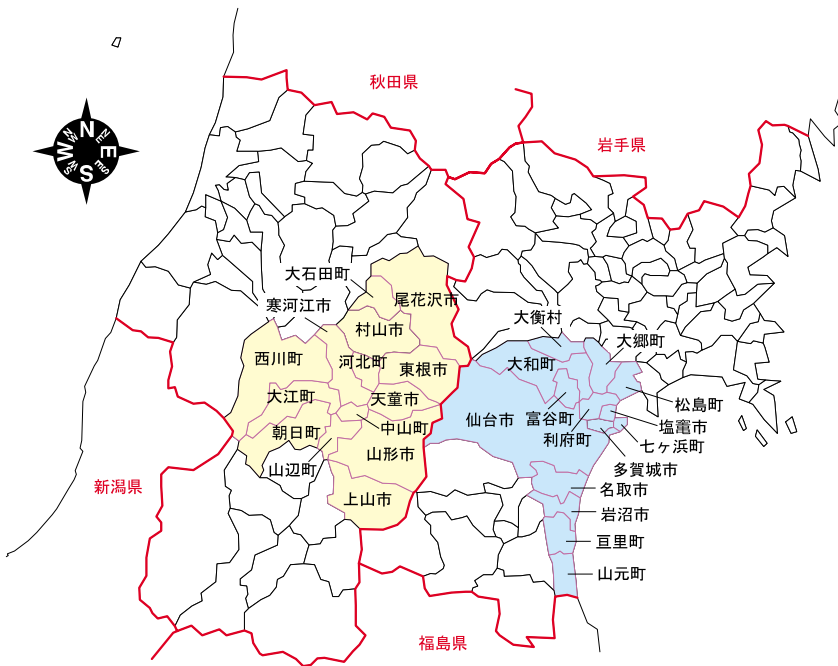
二〇〇万交流人口圏を活性化させる意味、その中で行政の役割は。

武田課長 県レベルの場合だと、消防・防災上の連携とか、産業関係の連携とか、行政が前面に出ての連携の議論になってしまつ。それはそれで必要であるが、このたびの取り組みのポイントは、あくまで最もベースとなる人と人、地域と地域の交流や連携をもう少し活発化させたいということである。

民間ベースのさまざまな交流の積み重ねの中で課題があり、行政上の施策でクリアできるもの、市町村行政間で解決すべきものがあるとすれば、改善していきたい。そういう広がりや県と県の関係にもつながり、連携を深めていく流れになることを期待している。

今まで目に見えない県境という壁が邪魔になつていた観があったが、少なくとも、行政レベルで市町村同士の情報交換が進むことによって、その壁を乗り越えることができるかも知れない。市町村同士が自主的に交流することは大いに結構。この取り組みがそのきっかけにもなると考える。

山形県村山地域7市7町と宮城県仙台都市圏5市8町1村



山形・仙台両圏域の交流拡大に向けて、やまがた・仙台交流連携促進会議」のほかにもどのような施策を展開しているか。

武田課長 山形に仙台都市圏から相当多くの人々が来ているという感覚は皆さん持っている。例えば、そばを食べに来ているのは仙台の人が多いとか、そういう情報は断片的にある。しかし、具体的に何を求めて仙台の人が山形に来ているのか？ 何に山形の良さを感じているのか？ 実はよく分かっていない。交流を促進するために山形の魅力を高めよう

とする場合、こうしたことを的確に把握しておく必要がある。そのため、仙台市民の皆さんを対象とした「山形・仙台の交流に関するアンケート調査」を実施した。調査によって、交流の現状はどうか、仙台の人にとってどのようなPRが良いのか、山形の何が評価されているのかなどを再認識して、しっかりと受け入れ態勢を作っていきたい。

そのための施策として、「オンライン交流地域形成事業」がある。村山地域にはすばらしい資源が豊富にあるが、それらをもっと一回掘り起こし、光を当てる。その資源をネットワーク化し、地域の魅力付けにしたい。「ここにしかない、山形にしかない」と体験できない、味わえない、見ることができない」とか、さまざまな面のオンラインワン、山形にしかないものを交流の受け皿のメニューにしたいということである。具体的に今年度は、茂吉を辿る道」に取り組んでいる。斎藤茂吉という山形の文化、茂吉をたどることによって山形の良さを発見しようとするものである。

他には「湧水三〇選」とか「里山三〇選」とか「手作り体験」や「祭り」など、この村山地域にしかない良いものを掘り起こしてリストアップし、それを結びつけていきたい。山形にしかないオンラインワン資源にもっと磨きをかけるという事業である。

また、「グリーン・ツーリズム推進事業」もやっている。仙台都市

圏と山形の農村の交流、両圏域で不足していることを補充し合うような関係の交流を進めたいと考えており、市町村間のレベル、特に、仙台の都市部の住民が山形の農村の良さを求めて交流するグリーン・ツーリズムを広げようと考えている。

同じく関連施策として、サインシステム。道路案内などが分かりにくいという指摘もあるので、職員が目で稼いで自分で現場に行つてサインの不具合の状況を調査している。

さらに、広域連携による観光振興。仙台と山形が一緒になって外に向けて両圏域をPRする広域観光事業も行っていきたい。

次年度以降の展開は。

武田課長 次年度以降も「やまがた・仙台交流連携促進会議」は継続していく。情報・意見交換の場であるし、両圏域市町村間つながりの場でもある。

また、今年度はこの会議を通じ、グリーン・ツーリズム推進の一環として、山形県の朝日町に宮城県の七ヶ浜町から小学生の親子においでいただいた。来年は山形県側から出かけていくことになると思う。こうしたことが市町村間で始まるのだと思う。こうしたことから、お互い情報提供をする協力関係に止まらず、イベントの共同開催とか青少年の交流とか、社会教育施設の相互利用解放とか、そういう方向に進んでいけるのではないかと思う。

お互いの資源を有効に使って、人々が豊かに楽しく生活できる、そういう視点での取り組みを進めていきたい。足りないものはお互い補っていく。補う場合には近いところから、ということである。